小児気管支喘息の生活指導指針に関する研究

分担研究者	京都大学小児科	三　河　春　樹
研究協力者	北海道大学小児科	松　本　脩　三
	国立相模原病院アレルギー科	三　嶋　　　健
	東京大学小児科	早　川　　　浩
	国立小児病院アレルギー科	飯　倉　洋　治
	埼玉医大小児科	赤　坂　　　徹
	同愛記念病院小児科	馬　場　　　実
	星薬科大学薬理学	柳　浦　才　三
	神奈川県立こども医療センターアレルギー科	寺　道　由　晃
	国立療養所南福岡病院小児呼吸器科	西　間　三　馨

〔はじめに〕

気管支喘息は呼気性呼吸困難を発作性に繰り返す上気道疾患であり，その原因は極めて複雑なものがある。この病因は大略，遺伝素因によるもの，環境因子によるもの，心理反応によるものに大別される。実地の指導方針についてはさらに細分化された分野に基づくきめ細かな指導体制が必要となろう。そこで本年は気管支喘息の生活指導に関する研究の初年度として，分担研究者　三河春樹の他研究協力者9名を以って本班を構成し，分担を定めて気管支喘息患児の病因，病型に関する基礎資料を集積することとした。次年度以降は本年の成果を踏まえて調査研究，指導指針の具体的立案をはかる予定である。

〔指導要項についてのプログラム〕

本年のプロジェクト作成にあたって，終局的な指導目的を次の各項に置いた。

1）　生活区域の調整法

2）　食事指導

3）　運動処方

4）　心理指導

5）　薬剤使用についての注意条項

6）　遺伝についての相談

〔プロジェクトの作成〕

上記各項の指導に必要な基礎資料の収集のため，取あえず本年度は各個研究を主体として，次の各項を分担検討することとした。

1) 臨床症状の総括的評価

気管支喘息患者の分析を行う場合，重症度の変遷をチェックする基準が必要となる。この点に関して早川らは前期研究班よりひき続き客観性のある評点評価法の検討をすすめている。

2) 気管支喘息患児の素因に関する検討

気管支喘息患者は古くから家族集積性が強いものとされているが，現今，患児の特異 IgE 産生能と HLA との相関を問題とする議論が多い。松本らはこの点について，本邦気管支喘息患者の中で最も頻度の高く，かつ未だ検討対象となることの少なかったダニ喘息患児に HLA D 領域遺伝子と連鎖する疾患遺伝子の存在を示唆し，今後の発展の端緒を開いた。

喘息児の素因として今一つ問題となるのはアドレナリン受容器，アセチルコリン受容器の感受性の問題である。久保田らは気管支喘息児のリンパ球にアドレナリン受容器の感受性低下とアセチルコリン受容器の機能亢進を証明したが，三島らはこれが抗喘息剤としてのイソプロテレノール投与により，こうした素因が少なからず修飾されることを示し，また飯倉らは馴れの現象による受容体の機能低下が治療に重大な支障を与え得ることを明らかにした。

3) 気管支喘息患児の環境因子との関連

喘息児の主要抗原は家塵など吸入抗原であるが補助因子として食餌抗原がその難治化を促すことが多いという。馬場らは実地臨床の場でその可能性を検討し，その検出の手順を確立した。細井らは遅発型喘息や食餌アレルギーの抗原検出にその有効性を推定されている IgG–RAST キットの作成のため，現在隘路となっているモノクロナール IgG サブクラス抗体の工業生産に道を開いた。今後アレルギー疾患の抗原決定は特異 IgE と IgG 抗体の両面からその存在を探るべきであろう。

柳浦らはアスピリンによる，いわゆる薬物喘息が少なからず存在することを推定し，この動物モデルによって気道収縮の増強に迷走神経の反射が関与することを示した。

治療面については寺道らがテオフィリン治療の問題点をとりあげ一定の解答を提供した。また西間らは長期入院児の予後調査をかねて家庭訪問を実施し，環境素因のすべてをピックアップした。

4) 心理面よりみた気管支喘息児

気管支喘息児の心理的な分析については種々のアプローチがなされているが，判定に客観性が乏しいものが多かった。赤坂らは心理テストの成績判定の数量化を試み，成績に客観性を盛りこむことに成功した。今後その成果をふまえて喘息発症ないし悪化因子としての関連性を追究せねばならない。

〔まとめ〕

以上，われわれは気管支喘息成因の多面性を考え，日常の指導指針につながる問題点の総括的なピックアップを表した。発足に当って立案した準備体制はほぼ本年度研究によって出揃い，次年度以降の実地調査，ならびに指針作成へのスタートにつき得たものと考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔はじめに〕

気管支喘息は呼気性呼吸困難を発作性に繰り返す上気道疾患であり,その原因は極めて複雑なものがある。この病因は大略,遺伝素因によるもの,環境因子によるもの,心理反応によるものに大別される。実地の指導方針についてはさらに細分化された分野に基づくきめ細かな指導体制が必要となろう。そこで本年は気管支喘息の生活指導に関する研究の初年度として,分担研究者三河春樹の他研究協力者9名を以って本班を構成し,分担を定めて気管支喘息患児の病因,病型に関する基礎資料を集積することとした。次年度以降は本年の成果を踏まえて調査研究,指導指針の具体的立案をはかる予定である。